

「春告げ鳥」

元辻香苗

『春告げ鳥』

サイド：A

桜が満開の春のこと。みつけた。

そう囁かれたと思ったら自分の顔の横に腕が伸びて来た。

突然だつたため、その人物を確認する為に後ろを振り向くことすら出来ず私の体はその人物の腕の中に収まってしまった。

私はそこに焦りも驚きもしなかつた。

心の中で、ああ、今回は見つかってしまったのかと呟いた。

しかし、今の私は彼を知らない・・・いや、知らない振りをしなくてはならない。なんて滑稽なのだろうかと思う人はいるだろう。しかしこれは自分で決めたことであって、私はこれでいいとさえ思い始めている。

だから今更止めることなんて出来ない。
私は貴方にこの嘘をつき続けるのだ。

私たちは狂っているとそう感じながら。

一回目の人生は戦国時代と呼ばれる時代(1500年後半～1600年)だった。

豊臣が天下を治める時代。

私はそんな時代のなか小国の百姓の子として生を授かつた。ただただ普通の子だった。裕福とはさすがにいかないが生きて行くのには問題なかつた。親もとても優しくたまに厳しく、私は親に恵まれたと今思う。

しかしそんな平和で平凡な時間は突然終わりを告げた。

私が齢14の時だつた。季節は春。豊臣軍が攻めて來たのだ。お侍なんていない百姓だけの小さな村。滅ぶのは時間の問題だつた。豊臣勢もただの領土拡大としか思つていなかつた。軍勢の規模もかなり小さなものだつた。手つ取り早く村に炎を放つたのだ。

あつけなく私たちの村は炎に包まれた。

村の百姓達は炎から逃げることすら出来ず死んで行つたのだろう。きっと私の両親も・・・・。
なぜ客観的のかつて？

それはもちろん私がその場に居合わせなかつたからだ。

その日私は母に言われて山まで山菜を取りに行つていた。14の子供を一人で山に？と思うだらうが、この時代では14でも世継ぎに出ても不思議ではないのだ。私はいつものように山まで山菜を取り家に帰ろうと山を降りてゐる最中に目にしたのは真つ赤な炎だつた。自分の村の方向から上がる真つ赤な色。私はとても嫌な予感がし、取つた山菜を投げだして山を駆け下りた。

山を降り村まで全力で走つた。そのときにはもう炎は收まつっていた。

「・・・・・」

村に着いたとき私は言葉を失つた。嫌な予感は的中してしまつたのだから。

私の足取りはとても重いものだつた。ふらふらとする足で向かったのは自分の家だつた。もしかしたら親はまだ生きているかもしれない。そう私のようにたまたま村を出ていて生きているかもしれない。そんな淡い考えを巡らせながら家へ向かつ

た。家へ向かう最中に真っ黒な何かは出来るだけ視界に入れないように、何も考えないようにした。家について母様と小さな声で呼んだが返事は勿論ない。

勇気を出して家に足を一步踏み出しだが、私に足はそれ以上進むことはなかつた。

そこからの私の記憶は曖昧で氣付は山に居た。変える場所はなく行く場所もない。私のように生きている村人はいるかも知れないが探すことはしなかつた。

平和を失つたあの日から一週間がたつた。私はずっと山にいた。

生存意欲はあるようで山にある草やキノコなどを食べて生き延びていた。

しかしそれがいつまでもつか・・。

餓死するのも時間の問題だつた・・それとも・・。

さらに2日がたつた。私はもうその場所から動くことすらしなくなつた。

そろそろだと自分でも悟つていた。後悔がないとは言えないがそれなりに幸せだった。母様と父様の元にいけるなら・・

私は静かに目を閉じた。

ガサツガサツ

草をかき分ける音がした。

私はその音を聞くと、閉じていた目を開け思わず笑つてしまつた。

ああ、餓死で死ぬと思つていたが残党狩りのお侍さんに自分は殺されてしまうのか。

私は逃げることはしなかつた、否逃げる気力は既になかつた。

草をかき分け顔をのぞかせたのは中年の男性だつた。私は幽かな視界にその人物を入れると氣を失つた。もうこの目は開くことはないだらうと思いながら。

しかしその期待は嬉しいことに裏切り、次目を覚ますと自分はふかふかの布団で寝ていたようだ。しかもこの布団は自分の家にあつたものよりもかなり上質なものだ。なぜ自分はこのような場所で寝ているのか分からなかつた。あたりを見回しても大きな部屋なというぐらいしか分からなかつた。

私は今の状況が分からず布団から上半身を起こし天井を眺めていた。
すると部屋の襖が開かれた。そこから顔をのぞかせたのは最後に見た中年の男性ではなく自分よりも3つほど年上のよう見える真っ白な少年だつた。

「ああ、やっと起きたのか君」

これが私と彼の初めての出会いだつた。

それからと言うもの自分でも驚くほど話は進んでいった。

あの日私を拾つてここまで運んでくれた中年の男性はこここの領主様だつた。

なぜ領主様のような人があんな山にいたのかはあえて聞かなかつたが。

ここは豊臣の配下である中国。まさか今までの自分の身分ではお目にかかることなんて考えられない身分の人に拾われたとは驚きを通り過ぎて嘘ではないのかと疑つてしまふレベルだつた。

さて、本題はここからだが、なぜ領主様は私のような小汚い小娘を拾つてくださつたのかを聞いた時、領主様は笑つてこうおつしやつた。

娘が欲しかつたと

領主様は私のことについては何も聞いてもなかつた。

しかし領主様はきっと私が滅ぼされた村の生き残りであることを知つていたことだろう。
だから私もそのことについては言及しなかつた。

私は良き人に拾われたのだなど、今にも死にかけていたこんな私を・・・。

そう思うと目から涙がこぼれた。

今思うと村がなくなつたときは涙を流さなかつたなと思う。

今までの分全ての感情が目からは涙が止まらなくなつた。

「泣くな、君」

そんな私に声をかけてくれたのは貴方だつたね。

貴方は泣いている私の涙を脱ぐつてくれた。これは多分子供相手に慰めている行為だつたのだろうが私は嬉しかつた。

彼はこここの領主様の息子だそうだ。将来を約束された私とは違う世界の人。

あれから3年がたつた、私は17歳になつた。ずいぶん成長したものだと自分でも思う。

あれからここに身を寄せるにあたつて、沢山のことを習つた。百姓の子であつた私では考えられないことばかりだつた。まづは作法から身だしなみ、茶道、華道、琴までも。恥ずかしくないようには必死で事に及んだ。忙しく大変であつたけど、辛くはなかつた。逆に楽しいとまで感じた。何から何までが新しいことでキラキラしていたのだ。

そして貴方の存在もとても大きいものだつた。

「今日の習い事はもういいのか？」

夕方、縁側に座つてゐる私に話かけてくれる貴方。

3年とは恐ろしいものだと実感する。まだ少し残つていたあどけなさが抜け、立派な男性になつた貴方。

この城で私に話しかけてくれる人はそんなに多くない。何たつて私はただの身分の低い居候なのだから。だから私に話しか

けてくれる貴方に私はどんどん引かれていくのも時間の問題だつたことだろう。

「〇〇様、ええ、今日の習い事は全て終わりました」

そうかと言うと貴方は私の横に腰を下ろした。

お茶をご用意しますと立ち上がるうとするとといふと貴方はいった。

「君は何時までたつても俺に他人行儀だな。父も言っていたが君は家族だ。そんなに改まらなくていいだ」

私はもう一度縁側に腰をおろし貴方の横に並んだ。

家族・・その響きはとても素晴らしいものだ。しかしその言葉に溺れてしまうのがとても恐ろしいのだ。

私はただの居候。あなたはこの城の次期領主様になるお人。

世界が違う。そう自分に言い聞かせる。

恋心なんでもってのほかだ。自分の感情を押し殺し貴方と接する。

「いえ、そのような訳にはいきません。〇〇様は次期領主様になるお人。私のような者に話しかけて下さるだけでとてもあります。」

そう言うと貴方は少し悲しそうにする。それもまた私の心を揺さぶるのだ。

しかし感情は出さない。これが私の決めたルール。

感情に出せばそのまま流されてしまいそうだから・・・。

さらに2年たつた。私は19歳になつた。

その日城の中はとても騒がしかつた。

いや、ここ最近城の中はとても慌ただしかつたのだ。

何があつたのかは誰かに聞いた訳でも、誰から教えてもらつた訳でもないがその話は嫌でも耳に入つて來た。豊臣秀吉が床に伏せたらしい。

私の村を攻めて來たのは豊臣であつたし、豊臣のことなんて私にとつてどうでもよかつた。

しかし忘れてはいけないのは、ここが豊臣の配下であると言うことだ。

私は何とも言えない複雑な気持ちになつた。

ここ最近の貴方様はとても忙しくしていらっしゃるのを目にする。

縁側を歩いていると、貴方の怒鳴り声が聞こえた。離しているのはきっと領主様だろう。

怒鳴り声に驚いて一度足を止めてしまつたが、このまま部屋の前で盗み聞きなんて無粋な事は出来るはずがない。私は足をすすめ自分の部屋へと戻つていつた。

次の日、私は領主様に呼ばれた。

それはいつものような領主様の気まぐれや灼とかではなく緊迫した雰囲気なのはすぐに分かつた。

部屋の襖を開けると上座に領主様、その横に彼がいた。

私はただいま参りましたと頭を深く下げた。

領主様の一言で私は表を上げたが、領主様と貴方様の顔はとても苦しそうで申し訳なさそうなお顔だったのも今になつても繊細に覚えている。

領主様が思い口を開き私に告げたことはあまりにも衝撃的だつた。

私の人生が狂い始めたのはここからだろう・・・。

今この国は危機的状況にあるらしい、豊臣が床に伏せたことをいいことに徳川家康が豊臣を裏切り謀反を企てた。豊臣の時代はこのまま終わるだろう。豊臣は徳川にうたれる。

では、ここはどうなるのだろうか？何度も言うがこの国は豊臣領だ。

この国を滅ぼす訳にはいかない、沢山の民を守らなければならないと考えるのが当たり前だ。

では、どのようにこの国を守ればいいのか・・・。

答えは案外簡単なものだ。この国も徳川に下ればいいのだ。

しかし、そう簡単に下り、信用されることなんてあり得ない。

そして、領主様が出された答えは、徳川からの信用を得る為に娘を嫁ぎに出すということだった。

嫁ぎと聞けば、そんな苦行なことと感じないかもしれないが、この時代、嫁ぎに出すということは人質に出すと同義語だ。

領主様には息子はいても娘はいなかつた。

しかし、養子の私がいた。

「本当に君には申し訳なく思っている・・・。こんな・・・こんなことをさせたくないのだ・・・。しかし・・・。」

領主様は私を徳川に嫁ぎにとおっしゃった。

一国の領主様が私なんかに頭を下げて、泣いているのを他の人が見たら、驚くだろう。

領主様はとてもお優しい方なのは出会ったときから知っている。

領主様は私のことを本当の娘のように接してくださいました。

こうして私の為に涙まで流されている。

そんな領主様の頼み事を断るなんて出来ようか・・・いや出来ない。この国は危機的状況。この國の為になるのなら私は・・・。

私は領主様の言葉に分かりましたと一言返事を返した。

私の戸惑いのない言葉を聞いて領主様は驚きお顔を上げて、何かを言おうとしたがその言葉を遮って叫んだのは貴方だった。

「君！――この話がどういうことを意味するのか分かっているのか？！」

私ははいと頷いた。貴方は立ち上がり私の方によつてくると両手を私の両肩においた。自然と見上げる形になり顔も近くなる。そんな貴方の顔はとても苦しそうで悲しそうで申し訳なさそうで・・・。そんな顔、貴方には似合わない。

「死ぬかもしれないんだぞ？！それも分かっているのか？！な、なんでそんな平気そうな顔をするんだ・・・なんで・・・」

貴方は私の顔を見るとどんどん力をなくし、私の肩に手をのせたまま私も前で座り込んで俯いてしまった。その時貴方がどんな表情をしていたのか私は知らない。

「5年前のあの日・・・死にかけの私を助けて下さったのは領主様でした。私は何か恩返しがしたいと常々考えていました。重く考へることはないのです。」

領主様と目が合いニコつと笑つてみせた。

「君が・・・君が逃げたいと・・・死にたくないと・・・そう一言でも言つてくれれば俺は・・・君を・・・君と一緒にどこだつて・・・国なんて関係ない。君が側にさえ・・・」

頭を垂れたまま私の肩を掴む力が強くなる。

また貴方は私の心を揺さぶる事を平然というのだから困つたものだ。

私は貴方の口抑えた。これ以上聞いてはいけない。揺らいでしまうから・・・。

貴方は突然の私の行動に驚いたようで顔を上げた。

私は貴方にだけ聞こえるようになりますと笑つてみせた。

そしてこれ以上ここには入れないと感じ、領主様に向かつて頭を下げ、失礼しますと部屋を後にした。

貴方は追つ手は来なかつた。

その日から貴方に合わなかつた。私が故意で避けている訳ではないので（無意識に避けていたら別だが）貴方が私を避けているのではないかと思つた。少し悲しく感じたが、この気持ちはしまつておこう。

そして、私がこの国から去る日も貴方と顔を合わすことはなかつた。
しかしこれでよかつたのだ。そう思うようにしよう。

さようなら

そう一言つぶやき私は去つた。

嫁いだ先は地獄だった。

嫁いだ先は、徳川勢の国だったが徳川からはあまり干渉されないような田舎にその国は存在し、その国の領主はそのことをいいことに好きなようにやっていた。

他の国に嫁いでいればこれほど酷くはなかつたのだろうが・・・外れくじを引いたと苦笑が漏れてしまう程だ。

人質と言うよりも奴隸の用な扱いだつた。いや奴隸そのものだつた。

与えられた居場所は地下牢だつた。

暴力・性欲処理は当たり前のように行われた。死んだ方がましだと思つた。いや死んだ方がましだつた。
しかし勝手に死ぬことも許されない。私の心が何も感じなくなつていくのも時間の問題だつた。先に死んだのは心の方だつたなんて、どこかの小説のようだと思うと笑えて来るが、そのときの私はもう表情も何もなかつた。
助けなんて求めるのはかなり前に捨てた。

そんな毎日だつた。私はこの国にきてから10年・・・・
とうとう私が死ぬことが許された。

死因は餓死だつた。ここまで使つといて簡単にぽいだ。
死ぬ間際に頭に浮かんだのは、貴方だつた・・・。

二回目の人生は江戸時代と呼ばれる時代(1700年代)だつた。

まず前提に知つていてほしいことは、私には前世の記憶が残つていたということだ。そんな夢小説や二次元みたいなど思う
だろうがそう割り切つて欲しい。

前世の記憶をもつたまま生まれた私だが、特に何かしたいとかはなかつた。確かに彼には会いたいとは思つたが、私は一度死に再び生まれたのだ。前世の記憶の中の彼になんて会える訳がないと割り切つた。

前世の記憶は生まれたばかりの私を苦しめた。あの忌々しい奴隸生活・・・思い出さないことなんて不可能だつた。私は感情も表情もない赤子だつただろう。

だが、だからこそ今回は前世のようにには・・・と

もう一度空っぽの私の心を満たしてくれる幸せを願つてしまつたのだ。

もう一度親の暖かさを感じたい。もう一度愛おしい人に出会いたい。もう一度笑えるようになりたい。もう一度・・・もう一度・・・。ただ平凡の幸せが欲しかつたのだ。

しかし、その願いは生まれて10年で終わつてしまつた。

私の親は母親のみだつた。私が生まれたときは普通の母親だと感じた。喋れるようになつてからも何故自分には父親がいないのか聞かなかつたが、私を大切に育ててくれた。

逆に、私の表情も感情も乏しく子供らしるもない私に申し訳なさを感じた。

そんな私を心配してくれる。何度も言うが本当にいい人だつたのだ。私は少しづつ笑えるようになつてきた。この幸せが続ければどれだけよかつたか・・・。

私が10の時、私は信じられないものを見た。

その日はただ普通の日だつた。いつもと同じ日だつた。扉が開かれるまでは。

突然扉が開かれて入つて来たのは複数の男性だつた。

家に侵入してきた男性は母を目にすると母を乱暴に捕らえるではないか。私はその光景に唖然とし動くことが出来なかつた。

捕らえられながら母は、娘だけはと叫んでいるのが聞こえたが私は突如上から来た衝撃で気を失った。その日以来母に会うことはなかった。

あとから知つたことだが、どうやら母は遊女だつたらしい。どういう経緯で遊女になつたかは結局分からぬままだが、母が自分から遊女になる訳がないのを私は知つていて。

そんな遊女だつた母だが、私を身ごもつたことをきつかけにこの牢獄のような遊郭から逃げ出したらしい。そして私を生み、追つ手から見つかることなく10年。

しかし追つ手に見つかってしまい、母親は捕まり、ついでに私も捕まつたという訳だ。

捕まつた後、私と母は離ればなれになつた。私は牢に入れられた。母がどこに連れて行かれたかは分からぬ。

牢での生活は前世でなれていて。大丈夫・・・大丈夫・・・母が迎えに来てくれる・・・。大丈夫・・・。自分を言い聞かせながら1ヶ月牢での生活を耐えた。そして1ヶ月たつたある日私に知らせが届いた。

母が自殺したと。

そしてその知らせと共にきてきたのは莫大な借金だつた。これは母が遊郭から逃げ出した事によつて元の借金が10年で溜まりにたまつた結果だつた。

一生を費やしても祓えるような金額じやなかつた。

私は母の死を悲しむ余裕も与えられず、牢から出され、母の代わりに借金を返すため10という年齢で遊女になつた。再び逃げられない牢獄に閉じ込められてしまつたのだ。

10で客がとれるのかと思うが、この時代そんなことは関係なかった。

私には拒否権なんてなかつた。

前世と同様、私はただの奴隸だつた。

一度なくした感情だつたが、母のおかげで少し取り戻しつつあつた感情に再び蓋をした。

前回よりもより深く蓋をした。

上げて落とされるのは、普通に落とされるよりも早くより深く落下するものだ。

願つてしまつたからいけなかつたのだ。幸せなんて願わなければこれほど心に傷を負うことはなかつたのだ。

そう考えれば考える程より思考のぬかるみにはまつて行つた。

再び感情をなくした私であつた、客はそんなことお構いなしだ。

私はもう何も望まないそう決めた。

私が遊女になつて15年たつた。私は25歳だ。後2年で前世の自分の年齢を抜くそんな春のある日。

私はある客をとつた。貴方にそつくりな人だつた。いやそつくりには語弊がある。私が前世で最後にあつた貴方は20歳だつたが、この客は28～30程の男性だつた。しかし貴方が成長したような、いや成長した貴方を見ているような人だつた。私の脳裏には私も生まれ変わつてゐるのだから貴方も生まれ変わつてゐるのも不思議ではないと思つたが、そんな考えはすぐには捨てた。

たとえその人が貴方の生まれ変わりであつたとしても、記憶をもつてゐるなんて万の確率もないのだ。そういうあるものじゃない。

期待なんてするな。期待するだけ無駄だ。結局その期待は裏切られる。

これが私の脳裏を支配する。私は何も望まない・・・。

私はその客も他の客と変わらない接客をした。

お客様の彼は遊郭にはなれていないのか少しそわそわしていたが、事を終えると彼は少し寂しそうにして帰つて行つた。また別の日彼は遊郭に訪れて私を買つた。

そしてまたある日も、ある日も・・・。

あれはこの遊郭の常連になつた。他に綺麗なお姉さんがいるというのに彼は私ばかりを買つた。
そんなある日彼は私に訪ねた。

「君は前世を信じるか」と「君には前世の記憶があるか」と

突然の彼の質問に私は焦ることも慌てることもしなかつた。私は冷静に彼の質問に答えた。

前世なんて信じないと・・・前世の記憶なんてないと・・・。

これが、私が貴方についた初めての嘘だつた。

今後私は、貴方にこの嘘を尽き続けることになるとはまだ思つてもなかつたが。

このとき私は彼が貴方であるとしかも前世の記憶を持つていると確信があつたが、あえて私はそのことを触れなかつた。

貴方も前世に縛られているのか。そう思つた。きっと貴方は優しい人だから、前世で私を嫁に出したことには罪を感じているのだろう。

しかし前世で私が好いていた人だからこそ、遊女である私なんかにかまつていないので貴方自身の幸せを探して欲しかつた。

さようなら、私の初恋

二回目の私の生は案外ちっぽけに終わってしまった。彼以外にも私なんか（私の容姿は平凡だ）に執着する客が何人かいた。その客の1人がどうやら現在で言うヤンデレという部類で、私はその客との事の最中に首を閉められ殺された。抵抗はしなかった。なんとまああつけない人生だったなと思つた。

しかし私が居なくなることで彼は私という罪の呪縛から解放されるのではないかと思うと、私の死にも何かしら誰かの役にたつのだと嬉しくかんじた。

三度目的人生は二回目と同等に江戸時代と明治時代にかけて(1800年代後半)で幕末と呼ばれる時代だった。今回私には父親はいたが母親がいなかった。母は私を生んで暫くして亡くなつたのだ。やはり前世の記憶を持つて生まれた私は、赤子でも意識ははつきりしていた。私を生んでしまつたせいで亡くなつてしまつた母親に対して罪悪感で押しつぶされそうだつた。

私の父は家にいることはほとんどなかつた。私は家で常に一人だつた。幼子らしからない私だつたが、父は私にかまつている余裕なんてなかつた。せいぜい迷惑のかからない子供でよかつたと思つていたかもしれない。しかしちゃんと養つてくれてはいたので、そこには感謝している。どこで何をしているのか幼子の私は知らないと父は思つていただろう。実際私は、父がどのようなことをしているのか知つていた。父は侍だつた。そしてある藩に所属していた。

1868年王政復古の大号令が発令された。

事はいつべんした。

新政府が誕生したのだ。

そして同年薩長と旧幕府との対立が激化し鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争）が勃発した。

結果がどのようになったかは歴史に詳しい人は知っているだろう。

会津藩は敗北。朝廷は会津藩を朝敵とした。

父が所属している藩がまた別だつたら、この結果を笑つて聞けていたことだろう。しかし私は知っていた。父が会津藩であることを。

その後会津は抵抗したが新政府軍にかなうことはなかつた。

父は幾度の戦争中に戦死したと聞いた。死体は見た訳ではないのが、まあきっとそうなのだろう。

しかし、そのことを耳にして涙は流さなかつた。

もともと私には感情という感情は持ち合わせていなかつたし、それほど父に対して思い入れもなかつた。

薄情なやつだと思う人は居るかもしれないが、きっとそれが正解なのだと思う。私は薄情なやつだ。養つてもらつた父が親でも何も感じず、何も思わないそんなやつになつてしまつたのだ。

それから私はどうしたかというとか処刑されて死んだ。

この時私は齢18だつた。

会津藩は朝敵となつたのだ。新政府に負けた会津藩は会津に所属する者を処刑していく。勿論身内も含まれる。

抵抗するものも勿論居た。国から逃げ出す者もいた。しかし私は抵抗も逃げ出すこともしなかつた。何故？と聞かれれば明

確に答える事は出来ないが、流れるがままにだ。

そして処刑が近づいてきたある日、私は今回的人生で初めて感情を出したかもしれない。

ほんと神様は意地悪なことをすると思つた。

新政府側に貴方を見たのだ。それが貴方であるかただの空似なのは私に確認すべはなかつたが、きっと貴方なのだろうと私の中で感じた。

そのころの季節も春で桜が満開の時期だつた。

今思うと貴方に出会うのはいつも春野費だつたなと思う。

神様は本当に意地悪だ。また私を貴方に会わすなんて……。

処刑当日、その場に貴方もいた。処刑される人数は少なくはないので貴方はきっと私に気づかないだろう。死ぬ間際、貴方を最後にちらつと見た。目があつたような気がしたが私から貴方までかなり距離があるので、気のせいかもしけないが…。このような状況で私が思ったことは「(あなたがこちら側ではなくてよかつた)」だった。

結局私の中の貴方という存在は消したくて消せないものになつていくのだ。
本当に神様は意地悪だ。

きっと来世でもまた貴方に会うような気がした。

期待はしないがただそう思つたのだ。

そして桜が散る下で私の命が散つた
さようなら、三度目の私・・・。

4度目の人生は大正時代から昭和時代にかけた（1900年前半）時代だった。今回の生では特に語ることはなんだが・・・。

本当に簡潔な人生だったのだ。

生まれた私には前世とは違い両親がちゃんと2人いた。

しかし、お金がなかつたのだ。

とても貧乏だつたのだ。借家すらなく野宿だつたほどお金がなかつたのだ。
戦後恐慌だつたこの時代だつたがこれ程まで酷いのは稀だつただろう。

そんなお金がない状況で生まれた私は望まない子であつたことだろう。

しかし両親はそんな私であったが、生んだ責はあるのだろう。育ててくれようとはしたようだ。
しかしやはりお金がなかつた。お金がなければ食べるのも手に入らない。

両親は私が1歳の時、私を置いてどこかに言つてしまつた。

まあ言つてしまいと捨てられたのだ。

両親は笑いもしない、表情も動かさない私に恐怖していた節があつたし、この状況にも私は何も感じなかつた。
ああ、どうどうか・・・と思つてしまふぐらい当たり前のように感じた。

その後1歳であつた私に何か出来るはずがなく、其処らへん道端で餓死して死んでしまつた。

本当に短い短すぎる人生だった。

貴方に会うことがなく、ほっとした自分が居た。

¤回目の人生は昭和時代だった（1900年中旬）。

そろそろこの時代からは現代に近づいてきただろう。

今回の私の人生はごくごく普通で両親も両方存命しとてもそれなりに幸せと言えるものだただろう。私もこの両親に迷惑はかけまいとおとなしい子を演じてみせた。

小学校、中学校、高校とごく普通に私は育った。

しかし、ある春の日私が高校から家へと帰宅する途中のことだった。

それはほんとに一瞬で私の背後でゴツと何か重い音がしたと思つたら、私はそのまま意識を失つた。

次、私が目を覚ましたらそこは冷たい部屋だった。そして後部がズキズキと痛んだ。このときやつたあの重い音は鈍器で自分が殴られた音なのだと理解した。そして気を失つた私を殴つた誰かがここまで運んだのだろう。

頭部には包帯が巻かれていた。

こんな状況は初めてだが、このような状況には慣れている私は特に焦る様子もなく私は部屋を見回した。

この部屋は地下室のような場所で、その部屋に置かれた鉄パイプ式のベッドに私は寝かされていたようで、さらには自分の両足には足枷がベッドの鉄パイプに繋がれていて1時 程しかない鎖で私はこのベッドから離れることが出来ない。そして、

この部屋には扉が1つで窓もない。これは所謂誘拐というやつなのだろう。

私はこの状況に特に何かをする訳でもなく、いや何もすることが出来なかつたが正しいのかもしない。私はただその場でぼおつとしているだけだった。

私を攫つた人は私なんて攫つて何をしたいのだろうか。身代金目当てなら両親に迷惑がかかつてしまふのでそれだけはどうしても避けたい。でも身代金目当て以外で私を誘拐なんてあるのだろうか。いつそ死んでしまつた方が両親に迷惑をかけずにするのだろうかなどなど何もすることがないので思考を巡らせていた。まあ例え身代金目当てであつて迷惑をかけないよう私がしんじところでそれを両親に伝える術がないのだけれど・・・と自分の思回路の残念さに苦笑した。

そして私が目を覚まして1時間程たつただろうか。部屋に唯一の扉が開いた。

さて、私を攫つた人はどのような人なのかと私は扉に視線をむけた。そしてその扉から入つて来た人に私は驚愕した。

「ああ、やつと目を覚ましたんだな。すまない、手荒なまねをしてしまつて頭は大丈夫かい？」

入つて來た人物は私が起きていることを確認した後、自分が殴つた私の頭部の心配をした。

私は自分で殴つといてさらに誘拐した人物が心配していることに驚いたのではなく、その人物はまたしても『貴方』にそつくりだつた。いやもう目を背けることはやめよう。その人は貴方だつた。

貴方はベッドに座る私に近づいて来てベッドの端に腰を落とした。

「君があまりにも手に入らないから、このようなまねをしてしまつたが、これでやつと君は俺のものだ」

貴方は私の頬に手を添えてそのまま私を抱きしめた。

私はそれを抵抗もなくうけいれてしまった。

逆に私を求めてくれる貴方をさらに愛おしく思つてしまつた。

「やつと手に入れた。もう離したりなんてしない。」

先に狂つたのは私か・・・貴方か・・・。

そして私の軟禁生活が始まつた。

私の世界は貴方一色になつた。貴方は私をここから出してくれることは一度たりともなかつた。軟禁生活といつても貴方は私を大切してくれた。いつぞやの奴隸生活とは比べられないほどだ。

貴方は私に2回目の人生の時と同様の質問を投げかけて來たが、私はあのときと同じ返事をした。

私は何度だってこの嘘をつき続けるのだ。

なぜそのような嘘をつくのか・・・。理由は2回目のときは大きく異なる。

二回目のときは貴方が前世に縛られないようになると、そう思つてついた嘘であつた。

しかし、今回は貴方が私をもつと求めてほしくて・・・嘘をつくことで貴方は私を求めるのではないかと思つてしまつたのだ。

期待はするべきではないとあれほど自分に言い聞かせたというのに、やはり人間は欲求に忠実な生き物だとしみじみと感じた。

そして5回目の人生の私は老死だつた。

私の人生の中で一番幸せな死に方たつただろう。
貴方が側にいてくれる中で私は死ねたのだから。

6回目的人生はあまりいいものとは言いがたかった。勿論前世の奴隸時代や花街で生きていた時とは比べ物にならないかも
しれないが。

当時5歳だった私の両親は交通事故にあってなくなつた。即死だつたらしい。

そして祖父祖母もいなく身寄りのない私は親戚をたらい回しにされた。

私の両親には財産という財産もなく、こんな私を受け入れたところで一文の特にもならない。
なので、親戚も親戚で受け入れることを押し付け合つている状況だつた。

始めの親戚の家では居ないようにあつかわれ、ご飯も何も用意されない。

2つ目の親戚の家ではある程度、年齢を重ねたことによつて、全ての家事を押し付けられ召使いのように働いた。

3つ目の親戚の家ではさらに年齢を重ねたことによつて、その親戚の息子にいいように扱われた。

4つ目の親戚の家でも以下同文だ。

世間一般から見たら私はだいぶかわいそうな子になるのだろうが、私はこのことに対しても特に何も感じなかつたしあの頃と
比べればだいぶ生きやすい環境であると感じた。

そしてやっと高校を卒業し自立出来る年齢になつた私は親戚の家から出た。

出て行く際に恩を仇で返すつもりかと暴行されたがあまり気にしない。

親戚はなんだかんだで、使い勝手のいい私を召使いとして家に置いときたかつたのだろう。しかし私はそんなことを気にもせず家からでた。

そして家を出たはいいものの特に行く場所もないし高校を卒業したばかりの子供を雇つてくれるところも勿論ない。出来てアルバイトぐらいだ。

そこで私が向かつたのは子供でも雇つてくれて手つ取り早くお金も稼げるところだつた。そんな条件のいいところなんてあるのかと思うかも知れないが勿論ホワイトではない。所謂キヤバクラいうところだ。しかも裏ではお金で体すら差し出しているブラック違法店だつた。

なぜ自分の体を簡単に差し出せるのか・・・私は貞操観念が他の人と比べて低いのだと思う。いや低いのだろう。この体も初めてではないし、過去にもつと酷い目にあつた。これくらいどうつてことないとすら感じてしまう。

そこの店で働き始めお金もそこそこ集まつて、養つてもらつた親戚にも今までの私の生活費を送り、これから的生活にも非自由しないなと思い始めたころ貴方が店に現れた。

ああ、やはりこの時期も春だつたな・・・私はいつも春の日に貴方にである。

多分貴方は会社の付き合いでのような店に訪れたのだろう。嫌そうな顔をしていて面白かつた記憶がある。

そして、貴方と目があつたときの貴方の顔は嫌そうな顔から一変して目を見開いて驚いていたね。

しかし私は貴方を知らない振りをしなければならない。私は他の客にむけるようニコッとわらつてみせた。

この店で腹焼き始め私は今まで以上に表情を動かしていると思う。心はこもつていなが。今まで使つていなかつた表情筋を使うのはなかなか疲れる。

貴方は上司がいるにも関わらずすぐに私を指名した。貴方の行動に上司も驚いていたようすだつた。

その日は何事もなく終わり、貴方は帰つていつた。

そして貴方はその日を境にこの店に通うようになつた。

今まで固定の客なんて居なかつた私に初めて固定のお客が出来た。

他に働いている人はなぜ貴方が私を指名するのか理解出来なかつたと思う。

何度も言うが私の容姿は平凡でいいとは言えない。しかし貴方の容姿はとても美しくて白くてモデルのようで私とはとても不釣り合いだ。

貴方はこの店の裏で行つて いる体の売買のことを知つてしまつたとき貴方は怒つた様子で私に言つた。

「なぜこのような店で働いているのか」と

私は簡潔にお金が欲しく見える場所がないからと答えた。

その日貴方はお金を払つて私を抱いていつた。

そしてしばらく貴方は店に訪れなくなつたと思つたら、ある日店長にクビを言い渡された。

私はあまりにも突然のこと驚いた。店長に理由を聞くと店の奥の部屋に連れて行かれ、その部屋には貴方がいた。どうやら貴方がお金を出して私を買つたらしい。

いや少し語弊がある。お金を払つて私をこの店をやめさせるようにしたらしい。

「君がこんな店で働くことはない。俺が君を養つてあげるから。帰る家がないのだろ？俺の家において一生大事にするさ。ああ、あのとき叶わなかつた事がやつと叶つた・・・。」

そう言つて貴方は私に手を差し伸べた。

私が手を取らないことは考えなかつたのだろうか、貴方はとても嬉しそうだつた。
しかし私はやはり貴方の手を取つてしまつた。馬鹿なのは私の方かも知れない。

そして私は貴方と一緒に暮らし始めた。前世のように地下牢に閉じ込められることはなかつたが家からでることは極力なかつた。

貴方は常に幸せそだつた。私もそんな貴方を見ていることが幸せだつた。

私たちは狂つてゐる・・・そう感じた。

「回目の人生はごくごく普通で、両親も存命で貴方に出会うこともなく私は大学で出会つた人と恋をして結婚した。旦那はこんな私であつたが愛してくれた。

まだ子供は居なかつたが暖かい家庭だつたと思う。

しかしそんな家庭もすぐに潰れてしまつたのだが・・・。

結婚から1年ほどたつた。旦那の会社も落ち着いてきてそろそろ子供も欲しいなと思つていた時期だつた。

ある春の日の休日、旦那は家に居て、私は買い物に出かけていた。

両手に食材を持ち割らしは家に帰宅した。恐の夕飯は暖かい鍋にしよう、そんな呑気なことを考えながら玄関を開けたがいつもならおかえりという貴方の声が聞こえなかつた。どこかに出かけてでもいるのかもしないとあまり気にも止めずに荷物をもつたままリビングの扉を開けると私は扉の向こうの惨状に荷物を床に落としてしまつた。

「えつ・・・な、何これ」

思わずそんな台詞がこぼれてしまつた。

リビングは真っ赤だつた。床にも壁にもその朱は着いていた。テレビついたままで、テレビの前のソファで真っ赤な旦那が倒れていた。

このときやつとこの朱は血であることが理解出来た。しかもこの血は旦那の血だ。

旦那に近づく為私は思い足をあげてリビングに入ろうとした。

しかし突然誰かに布を口と鼻に押さえつけられ、布に薬でも塗つていたのか私はそのまま氣を失つた。デジヤヴだ。

次、私が目を覚ましたとき私は体を縄でぐるぐるに縛られていた。そして動く首だけ動かしてみるが外という事ぐらいしか分からなかつた。ザリツと砂を踏む音がした。私は首だけうごかしてその方向を向くとそこに立つていたのは貴方だつた。今世でもう貴方には会わないと思っていたがそんなことはなかつたみたいだ。

「君が俺以外の誰かのものになるのがいけないんだ。俺のじやない君はいらぬい。」

貴方の目はとても冷たかった。旦那を殺したのは貴方だつたのだろう。

貴方は私に近づいて私の手を掴んだと思ったら、私を後方に投げた。

地面に叩き付けられるかと思ったが私を包んだのは浮遊感だつた。どうやら私の背後は崖だつたようで、投げられた私はそのまま重力に従い落下していった。

落下している私、貴方がどんどんと遠くなつていく。手をのばしても縄のせいで身動きが取れない。

ああ、貴方がどこまで落ちて行くのか・・・。

∞回目の人生では前回のこともあり誰とも結婚はしなかつた。

死ぬまで独り身だった。

そして貴方とも出会うこととなかつた。

そして9回目の人生・・・冒頭に戻る。

「みつけた。」

そう囁かれた時には私は貴方の腕の中にいる。

貴方は狂っている。そして私も狂っている。

これからも貴方は私を求めて、私も求められるがまま。

これはもう逃げられない運命なのであると感じた。

しかし私たちは不幸ではない、幸せだ。

私たちの関係はこれでいいのだ。

私は貴方に前世を明かさない。貴方は前世に縛られ続ける。

さて、今世の貴方はどうやって私を縛るのだろうか・・・。

そして来世もそのまた次も・・・。

私はそつと目を閉じた。

END

(実は男視点もあるのですが、どのように彼が狂って行つたのか考えてみて下さい。)